春まだき

（２）
詩集　（中１～２年）

柊実　真紅
（とうみ・まこ）
as
霧樹里守 is 土岐真扉

目次

中学一年

（中学１年） 3
部活 4
五月 5
空 6
. 7
. 8
六月 9
梅雨 10
声 11
. 12
テレポートのできる虫、 13

中学二年

（中学２年） 17
夏休みの空 18
霧雨 19
夕焼け 20
. 21
（　いまでいう　セクハラ　） 22
. 23
. 24
. 25
『　福祉　』　（二年二組。） 26
自分の生き方について。　（二年二組。） 28
（伝言めも。） 29

奥付

奥付 33

中学一年

（中学１年）

（中学１年）

部活

暑い中、どなられどうしで まだつづく

セミの声とてもはや聞こえず

日がしずみ 夕やけ雲の はえるころ

空をながめて 一人で帰る

昼さがりみな一休み するころに

私ひとりが なぜに行くのか

試合の日 今日で終わりと喜ぶが

その日一日、一番つらい

部活なし、

泳ぎに行こうと思う朝、

窓を開ければ 雨が流れる

五月

どこかで吹いてる 笛のねが

わたしの耳を くすぐるよ

わたしも練習 しなくっちゃ

だけどねむいの

とっても ねむい

空

いつの間にか通り過ぎた日はもう帰ってきません。

“これでよかったのだろうか.....”

と、ふり帰り、なやんでみても しかたありません。

ただ 明日にむかって 歩んで行きましょう。

迷う事は数かぎりなくあるけれど、

なやむ事もかかえきれぬほどあるけれど、

全て 空がのみこんでくれる。

ああ、今日も空が 青いな。

人間とは、なんと小さな生き物だろう。

** 私はきたない人間です。**

** とてもひきょうな人間です。**

** いつも、いつも、まわりの人を不幸にしてしまう。**

** 利己主ぎの かたまり ！ **

** 大地は大きい。このちっぽけな私など、見えなくなるほどに、**

** 大きい。**

** 海は深い。**

** 山は高い。**

** どちらも人間一人を殺すことなど、**

** わけもないのだ。**

** 大きな 地球が**

** 息ずいている。**

私の悲しみを知るものは、だれもいない。

それほどに深くて大きい 穴 なのだ。

私は、この大きな地球にとって、小さな小さな ゴミにすぎない。

そのゴミが、泣こうと悲しもうと、たいして気にならない.....

いや、むしろまるで 気づきもしないだ。

それほどに、地球は大きい。

その地球も、果てしなくつづく深い宇宙（そら）の中では

けんびきょうと ぼうえんきょうを いっしょに使ったって見つからないだろう

そんな小さな地球の中の、汗一つぶにもならないような、

小さな小さなわたしの悲しみなど

あるかないかも わからないのだ。

六月

たあいもない おしゃべり。

バカげた じょうだん。

すべてが むなしく過ぎ去るばかり。

私は 太陽になりたい。

大きくて熱い、かぎりなくやさしい、

太陽になりたい。

だれか私に 希望を 下さい。

星が光っています。遠くで 光っています。

梅雨

あきちゃった。

宿題やるのは あきちゃった。

勉強するのに あきちゃった。

早く遊びに行きたいな。

それでもまだまだ 雨がふる。

本を読むのも あきちゃった。

落書きするのもあきちゃった。

早く泳ぎに 行きたいな。

だけどまだまだ 寒い空。

いつになったらやむのかな？

声

どこにいるのか はげます声よ

どこかで私を 見ているの？

どこで呼ぶのか 私の心、

上へ 上へと連れてゆく。

私を呼ぶ声 だ〜〜〜〜れ ？

遠い 空から 見ているの。

・先生は、生徒とおなじ上ばきを はいている。

上の方はえらそうでも、結局は生徒と同じだ。

・村瀬さんのうで、ガラスみたいに細くてきれいだ。

・窓から見える空、画用紙をはったように白い。

・新体操は、トウシューズのないバレエだ。

・ビヤダルの背広の ボタンは一つ。

・チックタック言っている時計を ひっくりかえすと ちがう音がきこえる。

・漢字は、クモのすと迷路のあいの子みたいだ。

・朝れんは ちこくの前ぶれ。

・小雨はねこのようにこっそりとやってくる。

・六教かの先生が てんでに宿題を出すと ねる時間が ０（ゼロ）になる。

・春だと言うのに、花をつむひまもない。

・早く寝たい時ほど、勉強の のうりつが落ちる。

・新緑のもみじほど春の青空に合うものはない。

・時計の音ほど ねむくなる音はない。

・朝の教室、先生が来たとたん、静かになる。

テレポートのできる虫、

虫がピョイピョイッと

目にもとまらぬ早さで

はねている。

そして、アッというまに

きえた。

中学二年

（中学２年）

（中学２年）

夏休みの空

雲が笑う

明るい太陽の光をあびて

雲が走る

青い風をうけて

雲が海から飛びたった

輝やく七月の光の中に

雲は笑う

大空をかけながら

輝やく

七月の光の中で

明るく

しあわせを歌う

霧雨

雨だか霧だか わからない

わからないような 雨がふる

ふる

ふる

ふる

ふる

落ちてくる

頭の上に 手のひらに

ポツポツポツポツ

しとしとしとしと

サラサラ パラパラ

雨がふる

霧のような

雨がふる

夕焼け

なにかを待って

夕陽をながめている

なにかを求めて

口笛をふいている

なにを待っているのか

自分でも

しらない

なにがほしいのか

自分でも

わからない

わたしのやり方は極単すぎる

と、あの人が言った。

もっと冷静にならなければならない

と、わたしに言った。

わたしがおこっていることを

わたしが悲しんでいることを

人に告げなければいけない

そう言って、わたしを見た

それは、つらいことなのだけれど－

わたしはそれをやらなければいけない。

あす、実行にうつさなければならない。

（　いまでいう　セクハラ　）

わたしは無視しているけれど

聞いていないのではないのです

耳をふさいでいるけれど

心は感じているのです

どうか、“大向こう” の 人たちよ

わたしに下品な冗談を聞かせないで下さい

わたしは笑えないのだから

楽しむことができないのだから

わたしは何も言わないけれど

感情を失ったのでは ないのです

口をつぐんでいるけれど

心は だまっていないのです

どうか “大向こう” の 人たちよ

わたしをからかうのはやめて下さい

わたしはおこっているのだから

悲しんでいるのだから

心が見えた

多くの人の考え

多くの人の心

まだ何も わからないけど

少しでも 知りたい

少しでも

深く

広く

気がつくと私はいつも一人だ

ドアにかぎをかけ

一人 部屋の中に すわっている

外は嵐

ときおり旅人がドアをたたく

しかし

わたしはドアを開くことをしない

部屋の中の安楽が

こわされることを恐れるあまり

わたしはいつも一人だ

ドアをあける勇気がないので。

道は いくとおりもあるけれど

行きつくところは 皆同じだ

言葉は いくつもあるけれど

しゃべる心は いつも同じだ

願いごとは

かずしれずあるけれど

祈ることは

ただ一つ

幸福に

なること

『　福祉　』　　（二年二組。）

最近 “福祉” という言葉をよく耳にするが福祉とはいったい何なのだろうか。

福祉運動というと募金を思い浮かべるので、慈善という意味なのかとも思ってみたのだが、どうもしっくりしない。

思いあぐねて辞書を引いて見ると『幸福』と、書いてある。

では社会福祉運動と言うのは社会全体の幸福のために働くことなのかと考えてみるが、それも何かそぐわないように思う。

なぜかというと、一般に行われている社会福祉運動のほとんどが労力奉仕だからである。

なにも労力奉仕や募金等が悪いと言うわけではない。ただ、それをする時の考え方が問題になる。社会の幸福を願ってではなく、見栄をはってかっこうをつけるためにやっている人もいるのだから。

確かにそれでも物質的には十分約に立つだろう。でも募金の時など、寄ふしたお礼に羽をもらうはずであるのに、たいていの人は “羽を買う” ために百円玉を投げこむのである。

そして、「羽を買うために二百円も払ったんだから、オレは善人なのだ。」と思いこんで、優越感を味わっている。これでは自己福祉である。

緑化運動のときもみんな争そって募金したが、そのくせ花だんにふみこんだり木を折ったりし、雑草がのびていようとおかまいなしである。

これらのことは気持ちさえあればすぐ改められる事であるのに、みんなその気持ちがないのだろうか。集まったお金でいくら木を植えても、雑草に囲まれていてはしょうがないではないか。みんな形式にとらわれて真心というものが入っていないのである。

全ての人が真心こめて人の幸福のためにつくしていれば、お金なんかはなくても、みんな幸福になれるのではないだろうか。

大切なのは他の人が幸福になるのを願うことなのだ。

それは何も社会の人々全部を相手にしなくてもいい。自分のまわりの人を幸福にすることができれば、その人たちがまたそのまわりにいる人の幸福を願うようになるだろうから。

そんなふうに全部の人が幸福になれたなら、自然自分も幸福になれるのでないだろうか。

物質的に多少不足していても、心が通いあっていれば幸福になれるのだから、形式にとらわれずに動くべきである。

そうなってこそ本当の意味での社会福祉ではないだろうか。

自分の生き方について。　　（二年二組。）

私は、自分の人生とか生きかたについて、かなり小さいころから考えていた。

それは、よくあるような「バレリーナになりたい」というような夢ではなく、『理想』についてである。

幼ち園のころ、私はかっこよく生きたいと思っていた。

何事においても人よりすぐれ、常にみんなのめんどうを見る強くて優しい人、それが理想だった。

いくらかたつうちに、自分の能力にかぎりのあるのを知った私は、多少ドジでもいいから明るく優しい人を理想とした。

時がたつにつれて、考えが変わり、

自分の思った事をはっきりと言う事を考えたり、一匹狼として生きようとも思った。

今は、完全に「我が道を行く」である。

理想というものは時により変わるのだから、いつでも自分が正しいと信じることのできるような生き方がしたいと思う。

（伝言めも。）

五時 に

必ず

たたきおこして

下さい。

必ず

おきます。

起きなかったら、

朝食（メシ）抜き !!

（マ）

奥付

奥付

春まだき（２）

../../book/20469

: 著者

柊実真紅

（とうみ・まこ）

as

霧樹里守 is 土岐真扉

著者プロフィール：../../users/masatotoki/profile

感想はこちらのコメントへ
../../book/20469

電子書籍プラットフォーム：パブー（https://puboo.jp/）
運営会社：株式会社トゥ・ディファクト

春まだき　（２）

著　　霧樹 里守（きりぎ・りす）

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社